

群 教 セ	G01 - 01
	平22.242集

自分の考えを論理的に書く力をはぐくむ国語科指導の工夫

— 書く過程に読み手の立場に立って表現を振り返る活動を取り入れて —

長期研修員 宮前 嘉則

《研究の概要》

本研究は、「書くこと」の指導において、読み手の立場に立って表現を振り返る活動を取り入れ、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむことを目指した。モデルとなる表現から自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点に気付く、それを基に互いの材料や構成が目的や意図にかなったものかを見直す。さらに、互いの表現を評価し合うことで、自分の表現を客観的に見つけ、効果的な表現にするためのめあてをつかむことができるようにした。

キーワード 【書く能力 論理的 読み手意識 表現を振り返る活動 根拠 構成】

I 主題設定の理由

生徒たちを取り巻く環境が大きく変化するなか、人々の価値観は多様化し、人間関係は希薄になっている。このような社会で、生徒たちは他者と合意形成し、共同生活を送っていかなくてはならない。その際、自分の考えを他者に納得してもらうためには、自分の考えを論理的に伝える力が必要である。

論理的に伝える力の基本は論理的に書く力である。しかし、各調査では自分の考えを論理的に書く力の不足が課題となっている。OECDが2003年に実施した生徒の学習到達度調査では、自由記述問題の無答率の高さや論理的な記述力の不足が指摘された。また、「特定の課題に関する調査」（平成18年度国立教育政策研究所）や全国学力・学習状況調査では、ひとまとまりの文章として一貫性のある文章を書くこと、相手意識や根拠を明確にして文章を書くことに課題があるとされた。

この傾向は協力校でも同様である。生徒たちは、文章を書く際、自分の考えをもち、自分なりに材料を探している。しかし、読み手からの同意や納得を得るための材料が適切でなかったり、文章構成を工夫していなかったりする。

これらの原因は、読み手意識の乏しさにあると考えた。読み手意識は、自分の書く活動や書いたものを、読み手の立場に立って振り返ろうとする意識であり、本来、文章を書く過程全般にわたって働かせるべきものである。しかし、これまでの国語科の指導を振り返ってみると、読み手を意識させるのは、学習過程の冒頭や書き上げた後の推敲場面が多かった。そのため、適切とはいえない根拠を選んだり、文章構成の工夫に目が向かなかったりしたのではないかと考える。

そこで、本研究では、読み手意識をもって自分の考えを書くことができるよう、書く過程に読み手の立場に立って表現を振り返る活動を取り入れる。具体的には、モデルとなる表現から、読み手が納得できる材料や文章構成のポイントなど、自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点に気付く。そして、それを基に、自他の表現を読み合い、表現が目的や意図にかなったものになっているかを見直す。さらに、自他の表現の変化を評価し合い、効果的な表現にするためのめあてをつかむことで、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむことができると考える。

以上のことから、文章を書く過程に読み手の立場に立って表現を振り返る活動を取り入れることが、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむために有効であると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

書く過程において読み手の立場に立って表現を振り返る活動を取り入れれば、読み手意識をもって取材、構成ができるようになり、自分の考えを論理的に書く力をはぐくまれることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 「つかむ」過程において、読み手の立場に立って表現を考える活動を行うことによって、読み手が納得できる材料や文章構成について考えるようになり、自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点に気付くことができるだろう。
- 2 「追究する」過程において、読み手の立場に立って表現を読み合う活動を行うことによって、自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点を基にして、自他の表現が目的や意図にかなっているかを見直すようになり、自分の考えを論理的に書くことができるだろう。
- 3 「まとめる」過程において、読み手の立場に立って表現を評価し合う活動を行うことによって、自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点を基に、効果的な表現にするためのめあてをつかむようになり、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむことができるだろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 自分の考えを論理的に書く力をはぐくむ生徒とは

本研究において、「自分の考えを論理的に書く」とは、「自分の意図や主張を明確にし、読み手に納得してもらえよう、材料や構成などに工夫して書く」ことである。

書き手は自分の考えを読み手に納得してもらうために、材料を選び、論理の展開などを工夫して文章を書く。文章が論理的に書かれているということは、読み手が納得できる文章の条件の一つである。

生徒たちは、小学校段階から論理的に文章を書く学習を重ね、取材や構成などの力を培ってきた。しかし、書き上げた文章は、読み手に納得してもらえ材料や構成となっていないことが多く、論理性の高いものになっているとは言えない。これは、生徒たちが論理的に文章を書くためのポイントを明確にしていなかったことや、そのポイントに照らし合わせて自分の言語活動やその成果を振り返る経験や力が不足しているためである。論理性を高めるためには、論理的に文章を書くためのポイントを明確にし、自分の表現を振り返る必要がある。

意見文においては、自分の考えを読み手に納得してもらい、ときには行動を起こさせることを期待して書くものである。だから、読み手を意識しながら、適切な根拠にしたり効果的な構成を工夫

表1 自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点(意見文)

校種	項目	振り返りの観点
小学校	主張	○自分の主張を書いている。 ○自分の主張が最初から最後まで変わらずに書いている。
	材料	○主張に対する根拠を書いている。 ○主張に関する自分の体験を書いている。 ○主張に関することを調べたり聞いたりして、分かったことを書いている。
	構成	○頭括型・尾括型・双括型を使って書いている。 ○文末表現（意見と事実、断定、推量、疑問）を工夫して書いている。 ○接続語や順序を示す語を使い、段落同士の関係を明確に書いている。
中学校	主張	○自分の主張をはっきり書いている。 ○自分の主張が矛盾せずに書いている。
	材料	○主張と根拠を結びつけて書いている。 ○体験や聞いたこと、調べたことを基にした事実を根拠として書いている。 ○個人の感想でなく、共感できる根拠を書いている。 ○具体的な人名・地名、数字を使って書いている。
	構成	○予想される反論とその再反論を書いている。 ○主張の位置や根拠の順序を読み手への効果を考えて書いている。 ○文末表現（呼びかけや反語、主張）を工夫して書いている。

したりする必要がある。「材料」ならば、「主張に関する自分の体験を根拠として書くこと」、「構成」ならば、「予想される反論とそれに対する再反論を書くこと」などのポイントが挙げられる。これらのポイントを基に、自分の表現を振り返って調整していけば、自分の考えを論理的に書くことができる考えた。

そこで、本研究では、論理的に文章を書くためのポイントを、文種ごとに、自分の文章が論理的かどうかを振り返る観点（以下、「振り返りの観点」という。）として整理した（表1）。そして、モデルとなる表現を読むことを通して、生徒がこのポイントに気付くことができるようにするとともに、これを活用して、自分の材料や構成を見直す活動を行っていく。

また、「自分の考えを論理的に書く力をはぐくむ生徒」とは、「読み手が納得できる文章を書くために、『振り返りの観点』を利用して、効果的な表現にしたり、今以上に読み手に納得してもらえる表現にするためのめあてをつかんだりして、自分の表現を一層論理的にしていこうとする生徒」のことである。「振り返りの観点」を基に、自他の表現を振り返ることで、自分の表現が読み手により納得できるものになったのは、「振り返りの観点」を取り入れたからであると、自分の表現を客観的に見つめることができる。さらに、他にどのような観点を取り入れれば、読み手に納得してもらえる表現になるのかというめあてを明確につかむこともできると考える。

(2) 読み手の立場に立って表現を振り返る活動とは

読み手の立場に立って表現を振り返る活動とは、「振り返りの観点」を基にして、自他の表現が読み手に納得してもらえるものになっているかを見直す活動である。この活動を取り入れることによって、書く過程全般にわたって、読み手意識を働かせながら、自他の表現を適切なものにできると考えた。

読み手の立場に立って表現を振り返る活動として、次の三つの活動を行う。

① 読み手の立場に立って表現を考える活動

これは「つかむ過程」で行う、モデルとなる表現から、「振り返りの観点」に気付く活動である。具体的には、同じ主張であるが、説得力のある材料や構成を工夫している文章とそうではない文章の二つを提示する。生徒たちは、このようなモデルとなる二つの表現を比較し、読み手の立場に立って、どちらが納得できる表現か、なぜ納得できるのかを具体的に考える。そして、納得できる理由を整理していくことで、読み手が納得できる文章を書くためのポイント、つまり「振り返りの観点」に気付くことができると考える。

② 読み手の立場に立って表現を読み合う活動

これは「追究する過程」で行う、自他の表現が読み手に納得してもらえる表現になっているかどうかを読み合い、適切な表現にする活動である。具体的には、文章を書く過程における材料を選択する段階、文章構成を吟味する段階で、「振り返りの観点」と照らし合わせて、目的や意図にかなった表現になっているか、自他の材料や構成を互いに振り返る。そして、互いの助言や表現を参考にしながら、読み手にとって共感できる適切な材料や読み手に納得してもらえる構成に修正する。そうすることで、読み手の立場に立って、自分の表現を見直すことができるようになり、自分の考えを論理的に書くことができると考える。

③ 読み手の立場に立って表現を評価し合う活動

これは「まとめる過程」で行う、効果的な表現にするためのめあてをつかむ活動である。具体的には、材料や構成を見直してきた文章が、読み手に納得してもらえる表現になったかを確認し、どのように「振り返りの観点」が取り入れられたからかを教え合っていく。互いに教え合うことで、「振り返りの観点」の適切な取り入れ方を自身で確認することになり、自分の表現を客観的に見つめることができる。また、他から指摘されたり、他の表現のよさに触れたりすることで、効果的な表現にするためのめあてを明確にもつことができると考える。

以上のように、文章を書く過程に、読み手の立場に立って表現を振り返る活動を行うことで、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむことができると考える。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 実践計画

対象	中学校第2学年	実施期間	平成22年10月12日～11月5日（全7時間）
授業者	長期研修員 宮前 嘉則	単元名	〇〇中パワーアップ作戦 -自慢できる学校にするための提言をしよう-

2 抽出生徒

A	「振り返りの観点」を基にして、自他の表現を考えたり、他の表現に触れたり、他の助言を受けたりしながら、適切な根拠を具体的に書く力を高め、主張と根拠に一貫性のある文章を書かせたい。
---	--

3 検証計画

検証計画	検証の観点	検証の方法
見通し1 「つかむ」過程	読み手の立場に立って表現を考える活動を行うことは、読み手が納得できる材料や文章構成について考え、自分の考えが論理的かどうかを振り返る観点到に気付く上で有効であったか。	・活動状況の観察 ・ワークシートの記述 ・学習プラン表（感想）の記述
見通し2 「追究する」過程	読み手の立場に立って表現を読み合う活動を行うことは、「振り返りの観点」を基にして、自他の表現が目的や意図にかなっているかを見直し、自分の考えを論理的に書く上で有効であったか。	・活動状況の観察 ・ワークシート、付せん紙の記述 ・学習プラン表（感想）の記述
見通し3 「まとめる」過程	読み手の立場に立って表現を評価し合う活動を行うことは、「振り返りの観点」を基にして、読み手に納得してもらえる表現にするためめあてをつかみ、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむ上で有効であったか。	・二次意見文 ・付せん紙の記述

4 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

さまざまな角度から学校生活を見つめ、自分の主張を明確にし、読み手にとって適切な根拠や効果的な構成を考えたり、効果的な表現にするためのめあてをつかんだりして、読み手が納得できる意見文を書くことができる。

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
学校生活の現状から自分の主張を明確にもち、読み手に納得してもらえる表現にしようとしている。	読み手の立場に立って、適切な根拠にしたがり、効果的な構成を考えたりして、自分の主張を論理的に書いている。	相手や目的に応じて、文章の展開に違いがあることを理解している。

5 指導計画(全7時間)

過程	時間	学 習 活 動	支援及び留意点	評価項目 (評価方法)
つ か む	1	○学習課題を知る。 「○○中パワーアップ作戦ー自慢できる学校にするための提言をしようー」(学年の仲間に600字程度の意見文を書く。) ○学校生活の現状を見つめ、自慢できる学校にするための主張を書く。	○書く必要感を高めるために、実生活(学校生活)の課題を設定する。 ○さまざまな角度から課題に気付くことができるよう、マッピングや二人組による交流を行う。	【書く能力】 ○さまざまな角度から学校生活を見つめ、自慢できる学校にするための主張を書いている。(付せん紙)
	2	○自分の考えに対する根拠を付せん紙に書き出す。 ○付せん紙を並べて簡単な構想表を作り、一次意見文を書く。	○自分の考えに対する根拠が複数出せるよう、簡単な例文を挙げて、一つの考えに対して多くの根拠が考えられることを確認する。 ○自分の考えと根拠を基に、構想表を作り、一次意見文を書くよう助言する。	【書く能力】 ○自分の主張を伝えるために、根拠を選んだり、文章構成を考えたりして、意見文を書いている。(一次意見文)
	3	○モデルとなる表現から、読み手が納得できる表現について考える。 ○読み手が納得できる文章を書くためのポイントを、「振り返りの観点」としてまとめる。	○「振り返りの観点」をまとめるために、説得力の乏しい表現Aと説得力のある表現Bを比較し、どちらがなぜ納得できるのかを整理するよう助言する。 ○「振り返りの観点」を基にして、自他の表現を見直すことを助言する。	【書く能力】 ○モデルとなる表現から、読み手が納得できる文章を書くためのポイントを理解し、具体的な言葉でまとめている。(ワークシート)
追 究 す る	4	○根拠に関する「振り返りの観点」を基にして、互いの根拠を読み合い、より適切な表現になるように修正する。	○互いの根拠を修正する方法が理解できるよう、簡単な例文を提示し、その根拠をより読み手が納得できるものにしていく活動を行う。	【書く能力】 ○「振り返りの観点」を基にして、互いの根拠を読み合い、より適切な根拠にしている。(ワークシート)
	5	○修正した根拠を使って、構想表を再構成する。 ○構成に関する「振り返りの観点」を基に、互いの構想表を読み合い、構成を工夫する。	○構想表例を挙げ、「振り返りの観点」と照らし合わせ、修正した根拠を使って構想表を再構成するよう助言する。 ○互いの構想表に助言や質問ができるよう、交流活動の方法を明確に提示する。	【書く能力】 ○「振り返りの観点」を基にして、互いの構想表を読み合い、構成の工夫をしている。(ワークシート)
	6	○原稿用紙に記述する際、注意するポイントを確認し、構想表を基に、自分の主張を二次意見文として清書する。	○読み手の立場に立つには、正しい表記をすることも大切であると伝え、表記に注意しながら清書するよう助言する。	【書く能力】 ○読み手が納得できる根拠や文章の構成を踏まえながら、自分の主張を論理的に書いている。(二次意見文)

まとめ	7	○互いの原稿を評価し合い、自分の表現を客観的に見つめるとともに、効果的な表現にするための次へのめあてをつかむ。	手だて3	○めあてを明確につかめるよう、「振り返りの観点」が取り入れられたかどうかを互いに教え合い、それぞれのコメントを整理する。	【書く能力】 ○自分の表現を客観的に見つめて、効果的な表現にするためのめあてを明確につかんでいる。(付せん紙)
-----	---	---	------	--	--

VI 研究の結果と考察

1 読み手の立場に立って表現を考える活動を行うことは、読み手が納得できる材料や文章構成について考え、自分の文章が論理的かどうかを振り返るための観点到気付く上で有効であったか。(見通し1)

(1) 全体の学習の様子

意見文を書くに当たって、「自慢できる学校にするための提言をしよう」という課題を提示した。また、書き上げた意見文は、提言集にして学年の生徒や新入生、保護者に配付することを伝え、書く相手や目的を明確にした。

生徒たちは、学校生活の現状や課題を考えるなかで、「部活動」「行事」「あいさつ」「服装」「校則」「委員会」などにかかわる主張を書き出した。そして、主張を裏付ける根拠を考え、一次意見文を書いた。その後、読み手が納得できる文章を書くポイントに気付くことができるよう、モデルとなる表現A、Bを提示した(資料編参照)。A、Bともに、同じ主張であるが、根拠や構成に違いをもたせた(表2)。

どちらが納得できる文章かを問いかけると全員が表現Bと回答した。その理由をたずねたところ、生徒たちからは「体験した事実が書かれているから」「事件数が書かれているから」「反対の意見の人のことも考えているから」「読んでいる人に呼びかけている文を使っているから」などの理由が出された。

そのなかで、表現Aの「気持ちがだれてしまうから(自転車通学に反対)」という根拠が納得できるのかが問題となった。多くの生徒が納得できないと回答し、「全員の気持ちがだれるわけではないから共感してもらえない」「気持ちは一人一人違うから根拠としては弱い」といった理由をあげた。そして、読み手に納得してもらうためには、「個人の感想でなく、共感できる根拠」が必要であることを確認することができた。

その後、生徒たちから出てきた観点を、「主張」「根拠」「構成」「その他」に整理し、「振り返り

表2 モデルとなる表現の概要

	【モデルとなる表現A】	【モデルとなる表現B】
主張	ともに同じ主張ではっきり書いている。	
根拠	○三つ挙げているが、根拠の一つに個人の感想によるものが含まれている。 ○具体的でない根拠が書かれている。	○二つ挙げている。 ○他者から聞いた出来事を書いている。(見聞) ○実体験を書いている。(体験) ○調査やアンケート結果をのせている。(調査) ○具体的な時間、場所、人物、数値を使っている。
構成	○最初に主張を述べている。 ○呼びかけの文を一文使っている。	○最初と最後に主張を述べている。(主張の位置) ○予想される反論とその再反論を書いている。 ○呼びかけの文を三文使っている。

表3 生徒が気付いた「振り返りの観点」

その他	構成	材料	主張	「振り返りの観点」
○一文を短めに書く。	○根拠の数や順序、主張の位置の工夫がある。	○人名・地名・会話、数字を使って、わかりやすく書いている。	○主張と根拠につながりがある。	○自分の主張をはっきり述べている。
○文末表現(呼びかけ)を工夫して訴えている。	○予想される反論とその再反論をあげている。	○自分の体験や見聞したこと、調べたことを基にした事実を挙げている。	○自分の主張が最後までに変わっていない。	
	○個人の感想でなく、共感できる根拠である。			

の観点」としてまとめた（表3）。

授業後の感想に、「読み手の立場に立ってみて、読み手が納得できる文章を書くポイントが分かった」「この観点を使って、自分の文章を読み手に納得してもらえらるものに変えていきたい」という記述があった。後者の感想を書いた生徒たちに、どんな観点を使うのかを聞くと、「主張に合うような自分の体験談を入れたいと思う」「（自分の部活だけでなく）他の部活動の様子を聞いてみる」「再反論を書いたことがないので書いてみたい」といった答えが返ってきた。これらの答えは、モデルとなる表現から、体験や見聞、反論などを取り入れると、読み手が納得できる文章になるということに気付き、自分の文章にもそれらを取り入れてみようという気持ちによるものと考えられる。

これらのことから、読み手の立場に立って表現を考える活動を行ったことは、読み手が納得できる材料や文章構成について考え、自分の文章が論理的かどうかを振り返るための観点に気付く上で有効であったと考える。

(2) 抽出生徒の学習の様子

生徒Aは、何にでも真剣に取り組める学校にしたいと考え、一次意見文では、主張を「体育祭などの行事で練習に遅れたりしないでみんなで協力した方がいい」とし、「クラスが一つになれる」「一人いないとやる気が出ない」「本番でクラスの力が出せる」という三つの根拠を挙げた。

モデルとなる表現A、Bを読み、表現Bが納得できる理由として、「自分の体験や他の人の体験が書かれているから」「事故の件数が数字で書かれているから」「最初と最後に主張があるから」「呼びかけがあるから」「自分の主張と反対の人のことが書かれているから」と書いた。

授業後の感想に、「自分の体験をくわしく書いて、自分の主張を納得してもらいたい」と書いた。どんな体験を書くのかを聞いたところ、「去年の合唱コンクールでみんなで練習したことや高原学校の Cutter をみんなでこいだことを書く」と答えた。このことは、生徒Aが、読み手の立場に立って表現を考える活動を通して気付いた「振り返りの観点」から、自分の体験を書くことに有効性を感じたことを示すと考える。

2 読み手の立場に立って表現を読み合う活動を行うことは、「振り返りの観点」を基にして、自他の表現が目的や意図にかなっているかを見直し、自分の考えを論理的に書く上で有効であったか。（見通し2）

(1) 全体の学習の様子

まず、「制服登校でなく体育着登校にするべきだ」という意見文の根拠と構成を考えた。生徒たちは、「汚すとクリーニング代がかかる」という根拠について、これでは十分納得できないことに気付き、どうすれば読み手が納得できるものになるかを考えていった。「クリーニング代を具体的に聞いて数字で表す」「汚した時の体験を具体的に書く」といった考えを出した。また、構成については、「主張を最初と最後に書く」「一番切実な根拠を最後に書く」「主張は断定の形で書く」「反論と再反論を入れる」などの指摘をした。初めて学ぶ予想される反論と再反論について、書き方のポイントは確認したものの、自分の主張に対して書くことに戸惑う生徒も見られた。

次に、自他の根拠を見直した。互いの根拠を適切なものにするために、質問や助言し合うよう促した。生徒たちは、体験や見聞を想起して、具体的な場所や人名、数値で表すなどして、根拠を修正していった。

さらに、見直した根拠を使って、構成を工夫していった。生徒たちは、読み手はどんな反論をしてくるか、それに対してどう再反論するかを中心に交流し合っていた。交流後、新たな構想表を作成し、それを基に二次意見文を書いた。

図1は、一次意見文と二次意見文を分析し、そこに取り入れられている「振り返りの観点」を

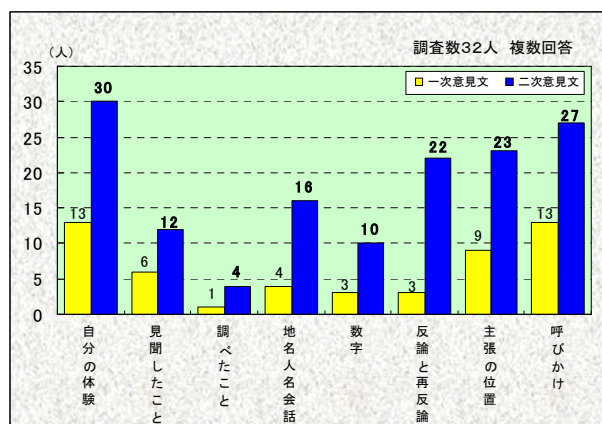


図1 意見文に取り入れられた「振り返りの観点」

集計したものである。

根拠について、一次意見文と二次意見文を比べると、根拠に「体験」を取り入れて書いた生徒が13人から30人、「見聞」を取り入れた生徒が6人から12人、「調べたこと」を取り入れた生徒が1人から4人へと増えた。また、「地名・人名・会話」を使って書いた生徒が4人から16人、「数字」を使った生徒が3人から10人へと増えた。また、構成について、一次意見文で反論を取り入れた生徒は3人であったが、二次意見文では22人へと増えた。最初と最後に主張を置いたり（8人→23人）、読み手に呼びかける文を入れたり（13人→27人）する生徒も増えた。それ以外にも、根拠の並べ方を変えたり、文末を断定や反語の形にしたりといった工夫をした生徒もいた。これは、生徒たちが「振り返りの観点」を取り入れて、自分の意見文を論理的にしようとしたことの表れだと言える。

しかし、予想される反論に対する再反論の内容については不十分なものが見られた。生徒の多くは、モデルとなる表現や自他の表現を読み合う活動を通して、予想される反論とその再反論を形式の上では取り入れることはできた。しかし、再反論の記述内容には、反論に対応していないものや内容的に不十分なものがあつた。

これらのことから、内容面での充実という点で若干課題が見られたものの、表現を読み合う活動を行ったことを通して、ほとんどの生徒が自他の表現が目的や意図にかなっているかを見直すことができ、自分の考えを論理的に書くことができたと考える。

(2) 抽出生徒の学習の様子

生徒Aは、「体育祭などの行事で練習に遅れたりしないでみんなで協力した方がいい」という主張に対して、「クラスが一つになれる」「一人いないとやる気が出ない」「本番でクラスの力が出せる」という根拠を挙げていた（図2）。

自他の根拠を適切していく場面で、生徒Aは、「クラスが一つになれる」の根拠に対して、「実際の経験はあるのか」「どのくらい練習したのか」「その時はどんな気持ちだったか」などの質問や「やる気が出ないというのは人によって

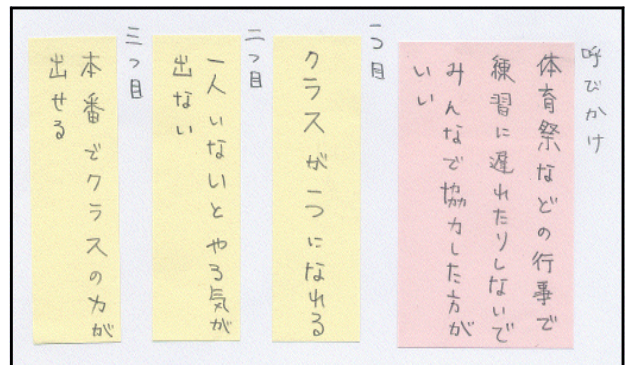


図2 生徒Aの構想表(一次意見文)

感じ方が違うから共感できるものに変えた方がいい」という助言を受けた。

交流を踏まえて、生徒Aは、一次意見文の三つ目の根拠「本番でクラスの力が出せる」を、「去年の合唱コンクールでクラス全員で練習して、本番が一番上手に歌えた」と体験を加え、さらに、「みんなで給食の片付けをして、5分早く昼休みの練習を始めたこと」と練習の様子を数字を使っ

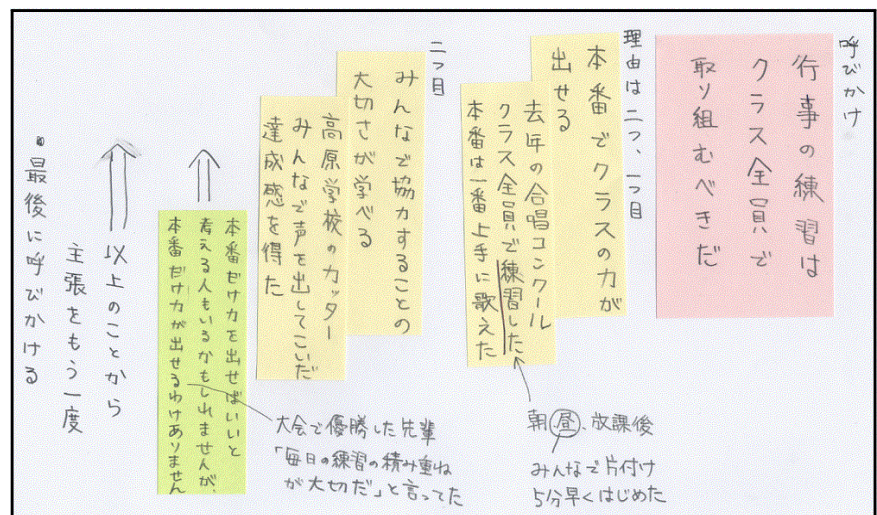


図3 生徒Aの交流活動後の構想表(二次意見文)

てくわしくした。また、二次意見文で加わった「みんなで協力することの大切さが学べる」という根拠については、高原学校の Cutter 訓練の時のことを想起して、さらに具体的な記述を加えた。最後に、主張を「行事の練習はクラス全員で取り組むべきだ」に変えた（図3）。

図3のように変えた理由を生徒Aに聞くと、主張については、「みんなの質問に答えながら、自分の言いたいことは何か考えたら、練習に遅れたり余分だと思った。主張をはっきり言うように

したかったから」、根拠については、「クラスが一つになったことを合唱コンクールの練習や高原学校の Cutter 訓練の時の体験を例に出したり、練習の時間を数字で表したりして書けば、読み手が納得できると思ったから」と答えた。「振り返りの観点」を取り入れて、自分の表現をより具体的なものに修正した様子が見取れる。

また、効果的な構成にしていく場面では、生徒Aは、主張の位置について友人から助言をもらい、構想表（図3）の最後に、「以上のことから（主張をもう一度）」「最後に呼びかける」と書き込んだ。また、反論に対する再反論の内容を悩んでいたが、助言をもらい、「本番だけ力を出せばいいと考える人もいるかもしれませんが、本番だけでは無理と先輩も言っていた」と書き、二つ目の根拠の後に記述することを矢印で記した。二次意見文では、先輩が引退する時、「毎日の練習の積み重ねが大切だ」と言った言葉を引用して再反論を書いた。このようにして、生徒Aは、一次意見文になかった「主張の位置」「反論」を二次意見文に取り入れることができた。

授業後の感想で、生徒Aは、「自分の体験したことを思い出して分かりやすく書くようにした。昼休みの練習を頑張ったことを具体的な数字で表してみた。再反論の内容を最初は悩んだけど、みんなに助言をもらって先輩の言葉を入れてみた。こういうようなことを書く時に気を付ければ、読む人にも納得してもらえ文章になると思った」と書いた。生徒Aは、読み手の立場に立って表現を読み合う活動を通して、他者の助言を受けることで、自分の表現を「振り返りの観点」を基に、今以上に適切なものに見直すことができたと言える。

3 読み手の立場に立って表現を評価し合う活動を行うことは、「振り返りの観点」を基にして、読み手に納得してもらえる表現にするためのめあてをつかみ、自分の考えを論理的に書く力をはぐくむ上で有効であったか。（見直し3）

(1) 全体の学習の様子

まとめの学習として、表現を評価し合う活動を行った。まず、一次意見文と二次意見文を比較して、二次意見文の方が読み手が納得できる文章になっていることを確認した。次に、互いの二次意見文やこれまでのワークシートを見直し、納得できる表現になった理由を、「振り返りの観点」を基に見つけ合い、もっと納得してもらおう文章になるにはどうすればよいかを助言し合った。

「体験が具体的に書かれていて分かりやすくなった」「具体的な場所や人の名前が書いてあって説得力がある」「呼びかけの文が効果的だ」「最後にも主張を書いた方がいい」「段落のまとめ方を工夫した方がいい」など、「振り返りの観点」が取り入れられているかどうかにかかわる内容がほとんどであったが、「例を順序よく説明していて分かりやすい」「主語が分からない」といった観点にない点についても助言し合っていた。

付せん紙を整理して、改めて自分の二次意見文とワークシートを振り返り、観点を取り入れることができた点と納得できる文章を書くために新たに取り入れるべき点を明確にして、学習全体を振り返った。

生徒たちの振り返りには、「体験や反論を入れたことで一次意見文より分かりやすい文章になった」「具体的な場所や数字で書くと説得力があることが分かった」というように、「振り返りの観点」を取り入れて書いたことで、読み手が納得できる文章になったということを客観的に見つめた内容があった。また、「調べたことが書いてあったので見習いたい」「次は反論を分かりやすく書く」「体験だけでなく、見聞したことを入れたい」というように、「振り返りの観点」のどの観点を取り入れればよいかを明確にしてめあてをつかんだ内容もあった。

ただ、できたところよりも改善点を多く指摘された生徒や改善点を指摘されてもそれを自力で修正することができない生徒、書いた文章に対して適当でないとされる改善点を指摘した生徒が見られた。そういった生徒に対する支援の仕方を工夫する必要がある。

これらのことから、課題は残るものの、読み手の立場に立って表現を評価し合う活動を行ったことは、「振り返りの観点」を基にして、自分の表現を客観的に見つめるとともに、論理的な表現にするためのめあてをつかむ上で有効であったと言える。

(2) 抽出生徒の学習の様子

生徒Aは図4の二次意見文を書いた。生徒Aも他の生徒と同様、二次意見文の方が納得できる文章になったと考えた。

アドバイスし合う場面で、生徒Aは、「主張がはっきりしていて分かりやすい」「体験が具体的に書かれているので説得力がある」「呼びかけの文がいい」「どのくらい練習したのかを数字で表している」「振り返りの観点」を取り入れていることを評価された一方、「根拠が二つとも自分の体験なので調べたことなどを入れるともっといい」という課題も指摘された。

学習全体の振り返りで、生徒Aは、「最初の文章よりも読み手に納得してもらえ文章を書くことができたと思う。自分の体験を具体的に書いたり、具体的な数字を使ったり、自分の立場とは違う人のことを予想して書いたりすることはとても大切だと思った。二つとも自分の体験を書いたので、次は調べたことが書けるといいと思った。また、会話文を書いていた人もいたので、体験のなかにカッターのかけ声を入れたらもっと納得できる文章になったと思う」と書いた。

生徒Aの感想は、自分の表現を振り返ったり、他者からの評価を受けたりしたことで、読み手が納得できる文章になったことを客観的に見つめていることを示している。また、「調べたことを書きたい、かけ声を入れたい」という言葉は、納得できる文章にするためのめあてをつかめたことを示すものだと考える。

「協力して取り組むことの大切さ」	生徒A
みなさんは体育祭や合唱コンクールなどの行事に協力して取り組んでいますか？練習には欠かさず参加していますか？	私は、行事の練習にクラス全員が協力して取り組むべきだと思います。なぜそう思うのかというと、理由が二つあります。
	一つ目は、協力して取り組むと本番でもクラスの力が出せるからです。去年の合唱コンクールでは、朝や昼休み、放課後、クラス全員で練習に取り組みました。特に、昼休みの練習は給食の片付けを全員でやって、いつもより5分早く練習を始めました。最初大変でしたが、だんだん慣れてきました。みんな真剣でした。どんどん歌も上手になっていきました。本番では、緊張しましたが、最優秀賞になりました。今までで一番よかったと思います。もし、練習に遅れたり、真剣に取り組んでいなかったりする人がいたら、心が一つになることはできなかったと思います。
	二つ目は、協力して取り組むことによって、みんなで協力することの大切さが学べるからです。一年生の高原学校の時、カッターをこいだのを覚えていますか。クラス全員で声をそろえて、カッターがどんどん進んでいったときはうれしかったです。カッターを全員でこいだから、協力する大切さを学び、達成感を得ることができたと思います。
	これに対して、協力して取り組まなくても、本番で力を出せばいいと考える人もいるかもしれません。しかし、普段の練習に取り組まない人は、本番でも力を出せないのではないのでしょうか。市総体で優勝した先輩もお別れ会の時、「毎日の練習の積み重ねが大切だ」と言っていました。
	以上のことから、私は行事の練習にクラス全員が協力して取り組むべきだと思います。みなさん、行事に協力して取り組みましょう。

図4 生徒Aの二次意見文

VII 研究のまとめ

1 成果

モデルとなる表現から「振り返りの観点」に気付き、それを基に自他の表現を見直したことで、適切な根拠や効果的な構成を取り入れ、論理性の高い意見文を書くことができた。また、自他の表現を評価し合ったことで、自分の表現を客観的に見つめることができ、論理性を高めていくためのめあてを明確にもつこともできた。

2 課題

「振り返りの観点」は、文種によって違うものであり、同じ文種であっても学年段階によって変わってくる。文種や学年の系統性の点から「振り返りの観点」を吟味する必要がある。

<参考文献>

- ・井上 尚美 著 『思考力育成への方略』(増補新版) 明治図書(2007)
- ・光野公司郎 著 『「活用・探究型授業」を支える論証能力』 明治図書(2009)
- ・長崎 伸仁 著 『論理力をはぐくむ国語の授業』 三省堂(2008)